生涯学習館林市民の会講座

館林藩の幕末（前編）

～戊辰戦争終結１５０年を迎えて～

戊辰戦争につながる館林藩の出来事

令和元年６月２８日

須永　清　（館林文化史談会）

「戊辰戦争」とは、

・１８６８年（慶応4）１月～１８６９年（明治２年）５月
・近畿地方から蝦夷地に及ぶ東日本一帯で戦う
・新政府と旧徳川幕府・佐幕派諸勢力との間での戦い

（『角川　日本史辞典』より）

慶応４年の干支が「戊辰（つちのえたつ）」であったため、「戊辰戦争」と呼ばれ、令和元年はこの戦争**終結**から１５０年目にあたる。政治の中心が将軍から天皇へ、幕府から朝廷へ変わる激動をいかにして館林藩が乗り越えたかを紹介する。

※蝦夷地：今の北海道。戦いは主に箱館（今は函館）の五稜郭で行われた。

今日の話　戊辰戦争につながる４つの出来事

- 館林藩の藩政改革
- 天皇陵墓の修復
- 長州周旋～勤王と佐幕の間での苦悩
- 梁田戦争

※戊辰戦争での戦いおよび戦争終結後の館林藩に関しては
後編（次回）の講演にて行います。

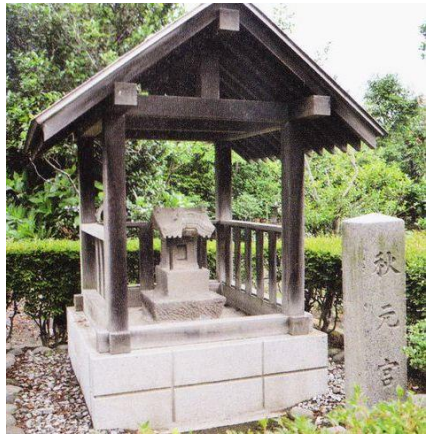
館林藩の藩政改革

館林藩の置かれた状況

①深刻な財政危機

嘉永元年（1848）当時、２０万両余の負債を抱え、
毎年５万両余に及ぶ収入不足の状態。更なる不安は、

天災による農村の荒廃　⇒　藩収入の減少
治安の維持・回復　　⇒　藩支出の増加

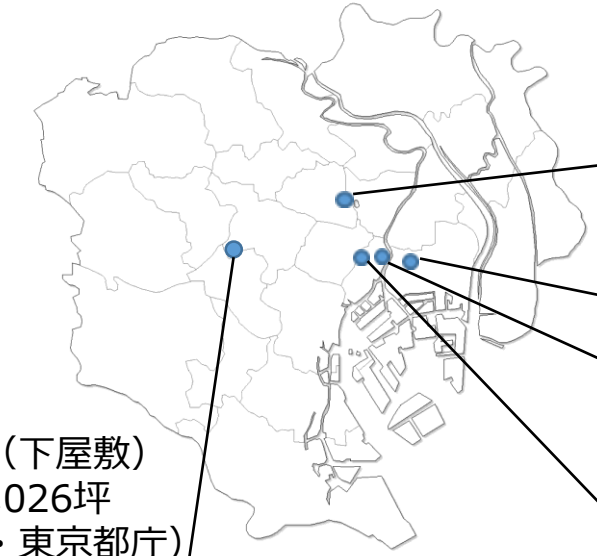


館林に起きた天災を示す遺跡
生祠秋元宮（永明寺境内）
『館林市史　通史編２　近世の館林』より

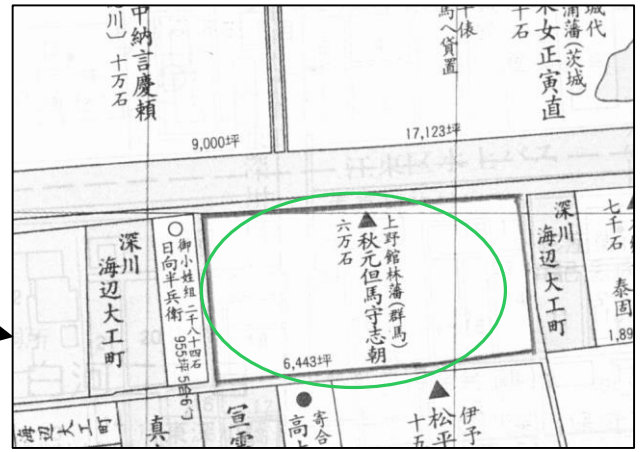
※「２０万両」ってどのくらい？
江戸時代の目安として１両＝米１石（150ｋｇ）なので、２０万石に相当する。
→　館林藩（６万石）の全収穫量の３年超の収穫に相当
なお、米価を5ｋｇ／2,100円（2016年　総務省統計）とすると、
１両＝63,000円なので２０万両＝１２６億円となる。
10ｋｇ入りスーパーの袋で３００万袋。

参考：国立国会図書館　リサーチ・ナビ　物価・貨幣価値の変遷を調べる（前近代）

館林藩の江戸屋敷（安政3年）



いけのはた
池之端（下屋敷）　4,927坪（上野動物園・西園の北）

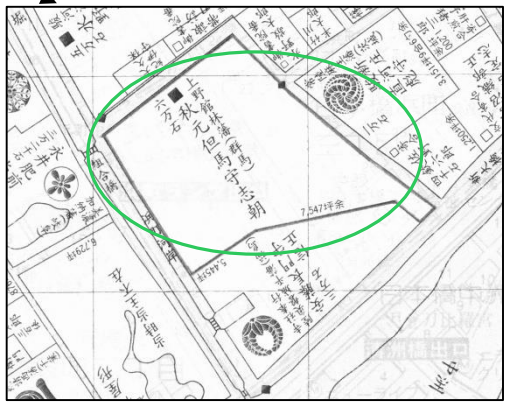


深川（下屋敷）　6,443坪
（江東区白河、小名木川沿い）

つのはず
角筈（下屋敷）
27,026坪
（現・東京都庁）

（東京ドーム　2個分）

呉服橋（上屋敷）　4,000坪
（東京駅・北東側）



浜町（中屋敷）　7,547坪
（明治座と清洲橋の中間）

藩邸地図は『復元・江戸情報地図』（朝日新聞社）より

江戸定府の藩士が多い
（老中就任、転封）
↓
広大な藩邸　49,943坪
（東京ドーム　3.5個分）
↓
物価高の江戸で支出が多い
（山形、河内分領からの
収入は全て江戸で消費）

M6.9

そのような状況の中、**安政の大地震**が発生（安政２年（1855）１０月２日）
上屋敷の被害は少なかったが、それ以外の藩邸に大きな被害（復興費用発生）

※安政の大地震の被害：町方では、倒壊家屋　15,000以上、死者　8,000人余（日本史辞典）

②急がれる軍事力強化

嘉永７年（1854）**ペリー再来航**と**日米和親条約の締結**

尊王攘夷運動の激化とそれに伴う治安の悪化の全国的な広がり

- 江戸時代、諸大名は強い軍隊を持っていない
- 館林藩はペリー再来航の際に異国船防御のための江戸湾岸警備を命じられるなど、軍事力整備が必要と感じる

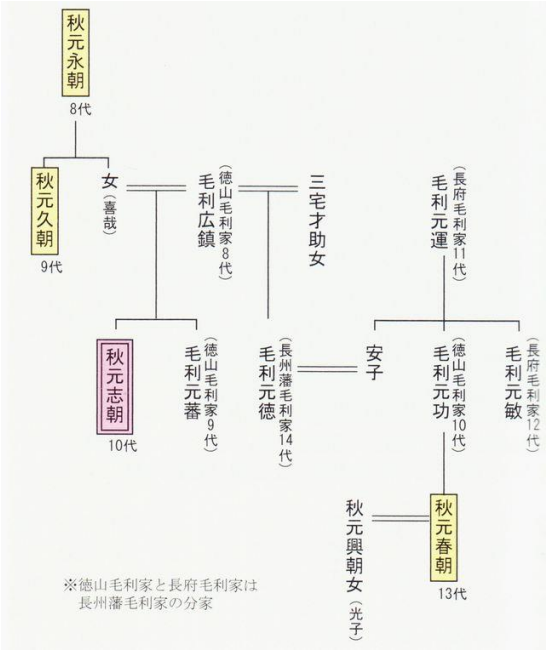
安政の藩政改革

藩主・秋元志朝（ゆきとも）

安政３年（1856）２月　改革を布告

１２月　改革令を発布

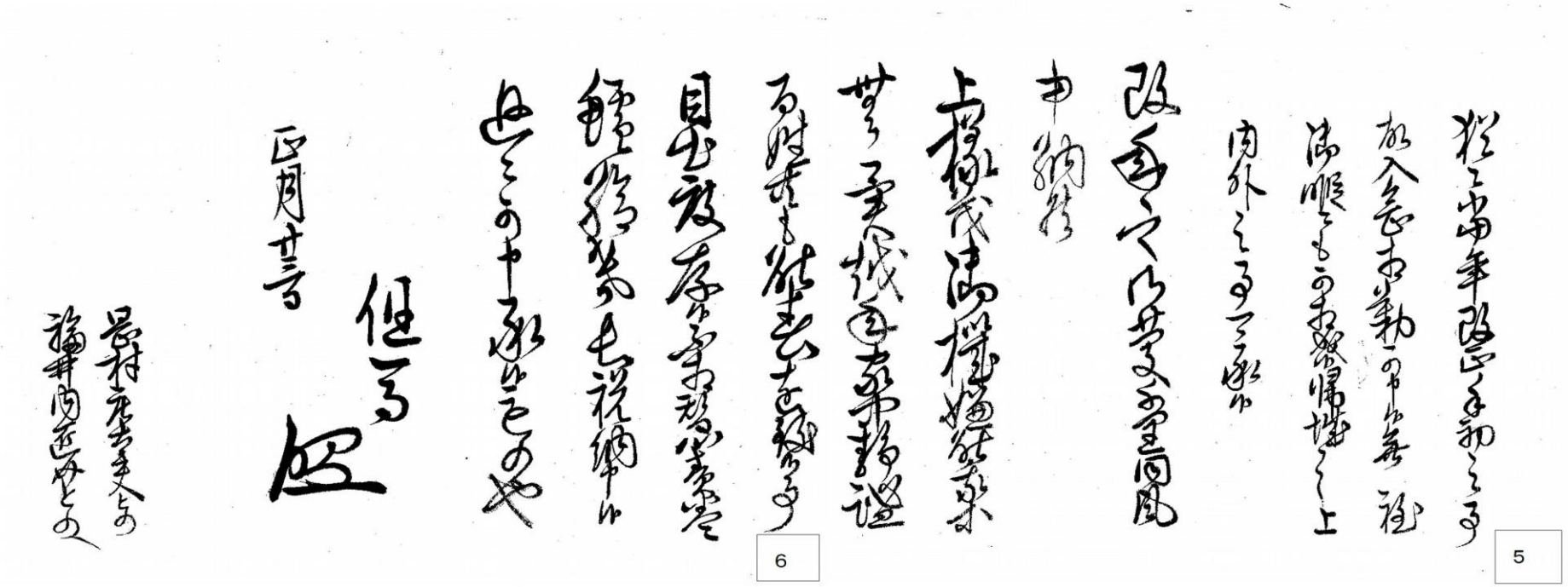
改正係：太陽寺典膳、<u>岡谷瑳磨介（おかのやさまのすけ）</u>



※秋元志朝（ゆきとも）

秋元家１０代藩主。父は徳山毛利家８代藩主の毛利広鎮（ひろしげ）、母は秋元家８代藩主・永朝（つねとも）の息女。秋元家９代藩主・久朝の養子となる。

長州毛利家１４代（戊辰戦争時は長州藩世子）の毛利元徳は弟、第一次幕長戦争の責任を取って切腹した長州藩家老の福原越後は兄。



猶々当年改正手初の事
故、入念相勤可申候。無程
御暇にも可相成候。帰城の上
内外の事可承候。
改年の御慶千里同風
申納候。
上様も御機嫌能我等
無恙越年家中静謐
百姓共も能春を致候事
目出度存候。不相替素巻
鱈給義、長祝納申候。
追々可申承候もの也。

但馬　花押

正月廿三日

岡村庄大夫どの
福井内匠介どの

秋元志朝から重臣に宛てた文書（館林古文書研究会『秋元家藩主の文書　解読文』より）

秋元志朝からの安政三年一月二十三日付けの書状。
藩政改革に対する強い意欲を感じる

改革の目的は**「財政改革」**と**「軍事力強化」**

- **定府の廃止**

  江戸に住む藩士を全て館林に移す。江戸での勤め（役目）がある
  もののみ、その期間に限り江戸藩邸に住む（勤番）

- **財政の一本化**

  館林4万石余、山形4万6千石余、河内2万7千石余を全て館林で管理

- **減石相続**

  文武の内、一芸にも秀でていない者は減石の上で相続

- **減禄**

  家禄を５年間６分引き（給料　5年間、6割減）

- **棄損令（きえんれい）**

  藩からの借金を帳消し

- **華美の禁止**（虚礼廃止、倹約の奨励）

・**殖産興業**

商品作物生産の奨励（茶・桑・楮（こうぞ）の栽培など）、機織り

※既に山形分領の紅花、漆が藩の財政を支えている

・**文武の奨励**

旧藩校「求道館」を再編し、藩校「造士書院」を開校

武術修行を奨励

・**軍備、軍制の近代化**

洋式諸兵器の導入など

改革の成果 ⬇

藩債２０万両の借財は消え、非常備金２万両を蓄える

天皇陵墓の修復

秋元家河内分領・同国丹北郡島泉村（現在は羽曳野市）にある雄略天皇陵を修復。

埼玉県行田市・稲荷山古墳と
出土した金錯名鉄剣（国宝）
※右の写真は復元模型
金象嵌の文字にある「ワカタケル」を
21代雄略天皇とする考えが有力である。

埼玉県立歴史と民族の
博物館にて撮影

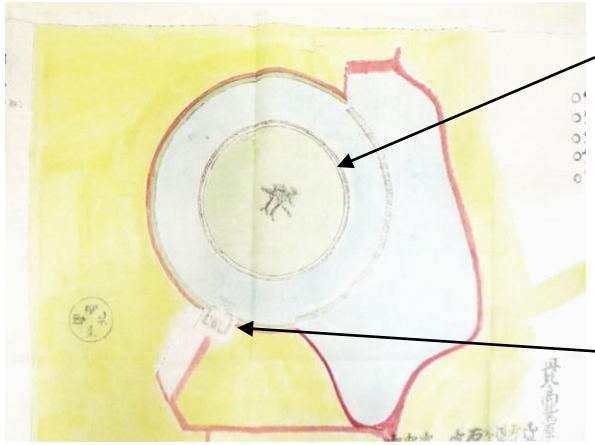
岡谷繁実の建議による。
実際の工事の指揮は多賀谷彦九郎（河内領の郡奉行）たちが執る。

※山稜修復事業
文久２年（1862）閏８月、宇都宮藩が幕府に建議、同藩が実施。荒廃した天皇・皇后を葬る御陵（みささぎ）を修復する。宇都宮藩は慶応元年（1865）までに関係個所も含めて、１０９か所の山稜を修復した。朝廷より山稜奉行に任ぜられたのは宇都宮藩・間瀬和三郎。後の戸田忠至（ただゆき）で、岡谷繁実は間瀬と親交があった。

山稜修復工事

館林藩の雄略天皇陵（丹比高鷲原陵（たじひ　たかわしはらりょう））の修復工事は文久２年（1862）１０月に許可を得、元治元年（1864）１１月に完成。

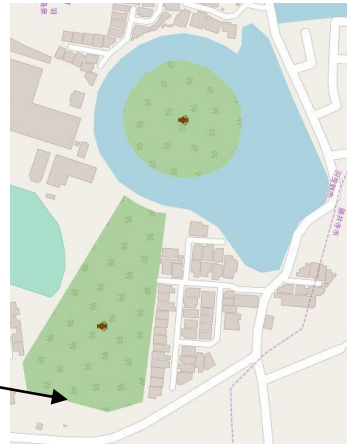
雄略天皇陵絵図（修復前）



雄略天皇陵絵図（修復後）
石垣を築き、拝所を造る、径 75m、高さ 9m

石垣延131間、
高さ４尺

拝所



現在の雄略天皇陵
（島泉丸山古墳）
拝所は明治時代に移動

多くの負担が発生した事業であるが、勤王の働きと認められ、
後に朝廷から褒賞を受ける。

※『雄略天皇陵絵図』は宮内庁宮内公文書館蔵、『現在の雄略天皇陵』は© OpenStreetMap contributors

余談・秋元家と戸田家の縁

・秋元家4代喬知（たかとも）、6代喬求（たかもと）、11代礼朝（ひろとも）の正室（志朝の養女） は戸田家出身という何代にも渡る親戚関係（山稜奉行・戸田忠至の子が後の12代興朝）
・山陵修復事業に積極的に取り組む
・（偶然であるが）藩主が懲罰的に隠居させられる（秋元志朝、戸田忠恕（ただゆき））
・浅草新寺町の江戸屋敷（現在、台東区元浅草の白鴎高校の場所）を引き継ぐ

　戸田家　：　元治２年（1865）２月１日　明け渡し
　秋元家　：　元治２年（1865）３月１日　呉服橋から移転

・戊辰戦争・東北の戦いに「新政府軍」として出陣
・「宇都宮」との縁

　戸田家　：　長く宇都宮城主を務める
　秋元家　：　宇都宮氏の末裔（とされている）

長州周旋～勤王と佐幕の間での苦悩

「文久３年（1863）８月１８日の政変」発生、長州藩は都落ち

長州の処分は？　①武力討伐
②話し合い解決（長州が謝罪する）

館林藩は同年11月に断髪党事件が起きる
（藩内の尊王攘夷派が安政の藩政改革を批判）

断髪党事件とは、

文久３年１１月１１日　藩内の尊王攘夷派藩士９名が岡谷瑳磨介に辞任を強要。
安政の改革への反発とともに、藩の尊王攘夷への対応の不満が原因。
（田山花袋の兄・実弥登は「暴戻極まれり」と『埋もれ木』で批判）
実行者：大久保鼎、木呂子善兵衛、上村勝之丞、大屋斧次郎、板倉三次郎、
高橋漸之進、中村真之丞、石川安蔵、塚越為三郎

「文久３年（1863）８月１８日の政変」発生、長州藩は都落ち

長州の処分は？　①武力討伐
②話し合い解決（長州が謝罪する）

断髪党事件により岡谷瑳磨介が辞職

→ 長州藩は藩主の実家であり、館林藩の考えは②

元治元年（1864）２月１４日の朝廷・参預会議で長州征伐が議論されるが、長州藩との交渉が秋元志朝に任される。（長州周旋）

※周旋の役割りは、福岡藩（黒田家）と熊本藩（細川家）にもあった模様

朝廷より親書を受け（３月）、岡谷繁実が長州との交渉を行うが、周旋は失敗（３藩ともに失敗する）

幕府と長州藩の対立は続き、事態は悪化

元治元年（1864）７月１９日　長州藩が京都御所に押し寄せ、守衛する薩摩・会津と戦闘（禁門の変）
元治元年（1864）７月２３日　長州征討の勅命→第一次幕長戦争→長州降伏

長州への内通を疑われ、秋元志朝隠居、礼朝（ひろとも）家督相続（10月27日）

岡谷繁実は家名断絶、家禄没収、永蟄居（後に追放され深谷へ）
上屋敷が呉服橋から浅草新寺町（旧宇都宮藩邸）へ移転
（元治２年（1865）３月１日）

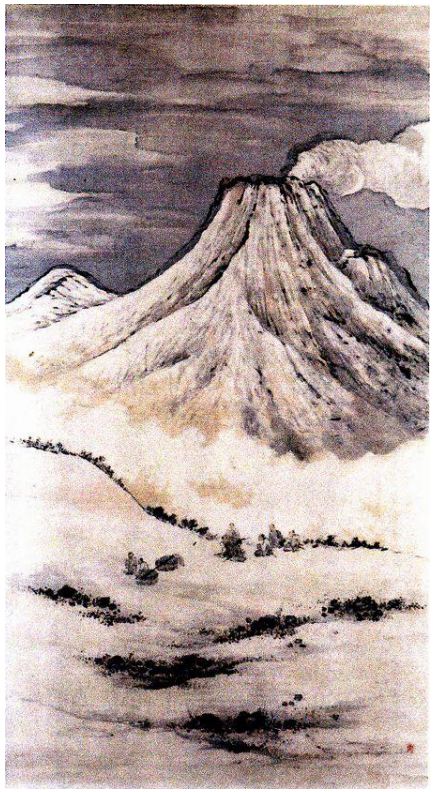
館林藩は佐幕色が強くなる

礼朝、幕府の奏者番に就任　慶応２年（1866）３月２４日

※秋元礼朝（ひろとも）
秋元家１１代藩主。父は掛川・太田家９代藩主の太田資始（すけもと）。室は宇都宮藩・戸田忠温の息女（志朝養女）。秋元家10代藩主・志朝の養子となる。
太田家は元館林藩主で延享３年（1746）に館林から掛川に移封された。
太田資始は老中を３回務める。奏者番は老中への出世ルート入口。

慶応３年（1867）10月14日 徳川慶喜、大政奉還
新政府は「徳川家の力を奪い取る戦い」へ
慶応４年（1868） 1月 3日　鳥羽・伏見の戦い（戊辰戦争開始）

「勤王」か「佐幕」かの判断が諸藩に求められる
館林藩は「勤王＝新政府を支持」に転換


『浅間山麓軍議図』
（田崎草雲・草雲美術館蔵）
館林藩と足利藩の藩士が勤王の相談をする

慶応４年(1868)	３月 ３日	礼朝、上洛のために江戸を出発
同年	３月 ９日	礼朝、東山道鎮撫総督・岩倉具定に倉賀野で謁見を乞うが、上洛の遅れを責められ、館林城で謹慎
同年	３月１５日	**金２万両と大砲2門を東山道鎮撫総督府に献納**
同年	３月２９日	謹慎を解かれ、戊辰戦争に出兵

混乱する大名・旗本

鳥羽・伏見の戦い後、新政府軍は征討軍を起こす

- 大名・旗本は旗幟を鮮明に！

  いかにして自藩が生き延びるか？

- 江戸は無政府状態（旧幕府軍の統制とれず）
  - 鳥羽・伏見の戦いに敗れて江戸に戻った兵の一部が脱走（下野方面）

    → 連れ戻して、羽生陣屋にて謹慎
  - 江戸では抗戦派の幕臣が恭順派と対立

    → 江戸にて新政府軍に対抗（彰義隊）

    東北諸藩（特に会津）を頼って江戸を脱出（伝習隊）
  - 旧幕府も旧幕臣を持て余す（例：新選組→甲陽鎮撫隊として甲府へ）

混乱の犠牲　～江戸藩邸への使者の遭難～

５月１３日　戸谷戸助と本木虎之助が江戸藩邸に使いをする。

（新政府軍としての出陣兵増員願いを伝達）

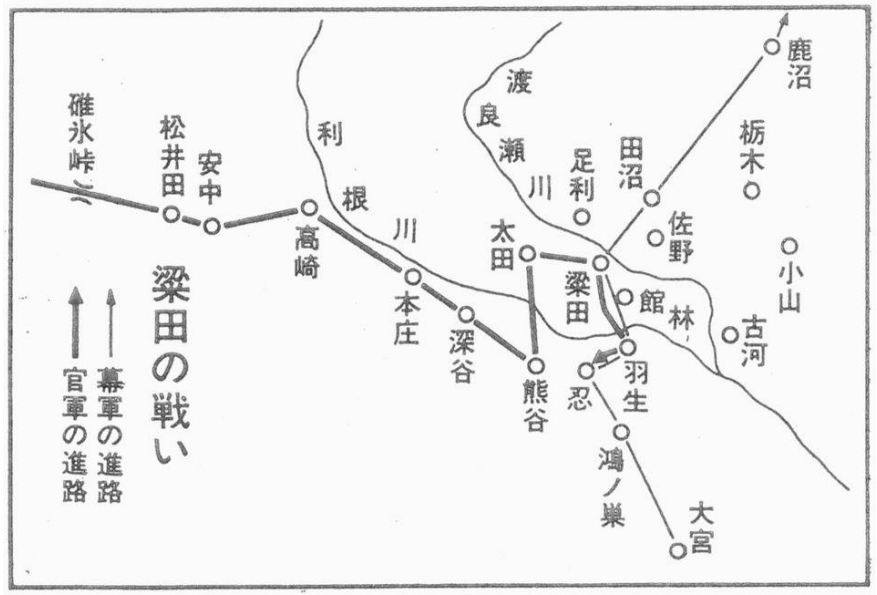
帰路、遭遇した旧幕府兵により**戸谷戸助が殺害**される

（１５日に新政府軍と彰義隊の間に上野戦争が起きる直前で、
江戸はたいへんな混乱状態であったと思われる）

館林・法輪寺の戸谷家墓地
（左側が戸谷戸助の墓碑）

梁田戦争　～戊辰戦争における東日本での最初の戦い

慶応４年３月 ８日　羽生陣屋滞在の元脱走兵を含む旧幕府軍が信州に向う。



下野新聞社『明治百年野州外史』より

・約900人、荷物馬荷６～７０駄、大砲４門、弾薬等

・総督・古屋作左衛門は勝安房守（海舟）の指図で
　旧幕府兵を引き連れて信州に向かう
　　（信州・中之条の天領陣屋を目指す）

・ 新政府軍が熊谷に集結しているため、
　中山道での衝突を避け、例幣使街道を通行

・その行動に関する情報が混乱（敵対行動？）
　→熊谷の新政府軍（薩摩藩、長州藩、大垣藩）が
　　危機感を持って出動

旧幕府軍から館林藩に対して城下での宿泊の申入れ

館林藩の対応

館林藩の方針　“かかわりを避ける”→既に藩論は勤王に決定（藩主は上洛途中）

郡奉行・山田秀実と奉行所配下８名が川俣の関所に出向き、古屋と交渉

・過激な勤王思想を持つ者との間に騒動の起きる恐れあり

・橋の架け替えで大砲の移動が不可能であり、城下の通行不可能

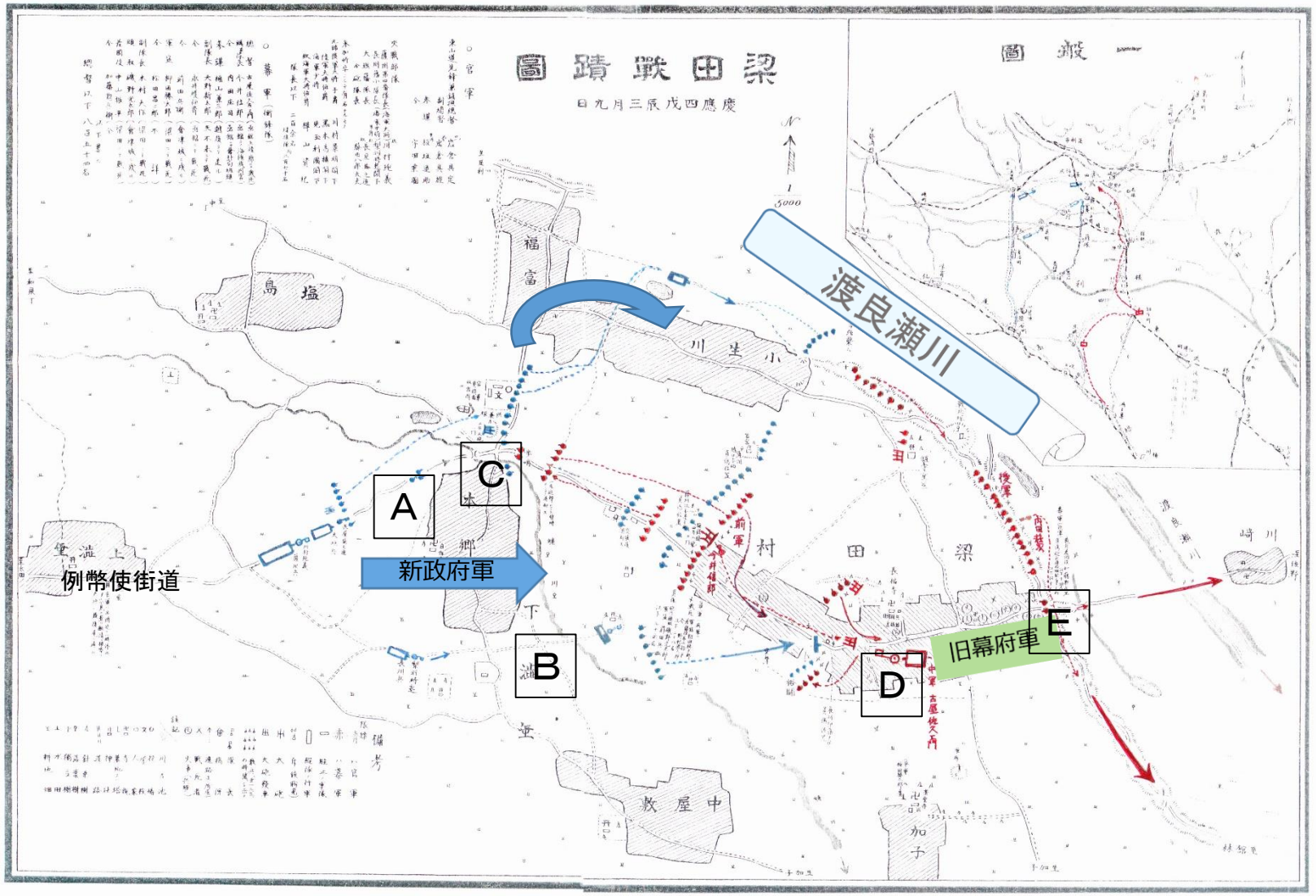
→ 城下の通行及び宿泊を拒否し、梁田宿での宿泊を勧める

↓

青柳村・元お仕置き場前（諏訪町信号）→富士浅間脇道（富士嶽神社）→西原（西高根町辺り）→太田街道→精進場（高根町）→木戸村寺道（木戸町）→落合橋（矢場川）→梁田へ（館林藩が案内役２名派遣）

梁田戦争

慶応４年３月９日前夜、熊谷から急行した新政府軍（薩・長・大）約200人が、早朝、旧幕府軍（約900人）を奇襲攻撃。（先鋒は大垣藩）



梁田戦蹟図（真下菊五郎『明治戊辰梁田戦蹟史』梁田戦蹟史編纂後援会）

現在の旧梁田宿

© OpenStreetMap contributors「栃木県足利市梁田町周辺」

現在の旧梁田宿

E 信号の先、土手の所がE地点

長福寺門前より西方

梁田宿道標・長福寺門前

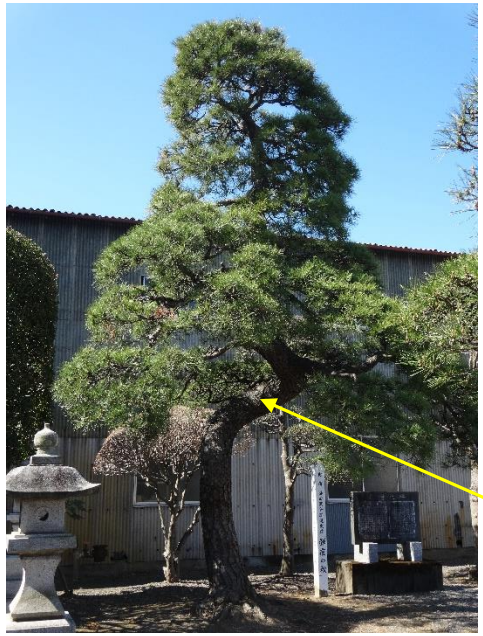
長福寺門前より東方・渡良瀬川方面。信号交差点右側が本陣跡

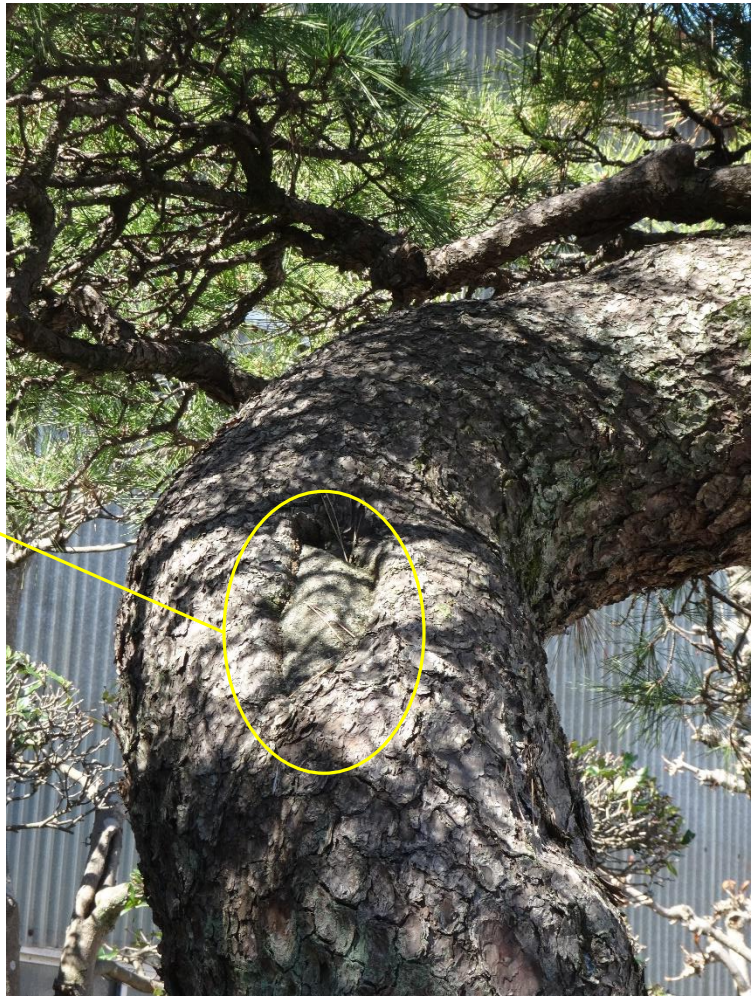
例幣使街道・薩摩＆大垣藩攻撃路

長州藩攻撃路

大垣藩大砲砲撃地、薩摩藩左翼進路

梁田戦争・関連史蹟





弾痕の松
梁田宿・中山楼の松に
残る梁田戦争の弾痕
（コンクリート詰め処置）
梁田公民館・招魂社

梁田宿・旅館　明保野の大黒柱
梁田公民館・展示室

梁田戦争の結果

人数の多い旧幕府軍が一時優勢であったが、最後は新政府軍が勝利

旧幕府軍	戦死	６４名	負傷	７６名
新政府軍	戦死	３名	負傷	６名

館林藩は高根村に出兵し警護に当たり、旧幕府軍兵士２名を捕縛。

敗れた旧幕府軍は田沼方面に逃走し、会津に向かう。

慶応４年３月１０日　新政府軍が館林で休息（足利町辺り）

館林藩より捕虜引き渡し、酒３樽、大砲・弾薬を献納

東山道先鋒総督・参謀より薩摩藩への感状に「征東初度之戦」とある

梁田戦争・関連史蹟

東軍戦死者追悼碑（長福寺）

戦死塚（長福寺）

戊辰戦役幕軍の墓（自性寺）

柳田勝太郎墓（崇聖寺）
※会津藩士

渡良瀬川（川向うが川崎）

戊辰戦争への出兵へ

旧幕府軍が滞在していた羽生陣屋（忍藩）は完成したばかりであったが、梁田戦争の次の日、１０日に梁田から進軍した新政府軍に敵対を疑われ、放火されて焼失した。（忍藩もこの後の東北の戦争に出陣することになる。）

かろうじて難を避けた館林藩も、ついに戊辰戦争に出兵

戊辰戦争での戦いおよび戦争終結後の館林藩については、「館林藩の幕末（後編）」にてお話させていただきます

ご協力

法輪寺　　（館林市朝日町）

梁田公民館　（足利市梁田町）

※敬称略。ふりがな順

参考文献

『秋元家の歴史と文化　－館林藩最後の城主－』　館林市教育委員会

『群馬風土記　vol.82、vol.83　梁田戦争と館林藩』　山田秀穂

『館林市史　資料編３　近世Ⅰ　館林の大名と藩政』　館林市史編さん委員会

『館林市史　通史編２　近世館林の歴史』　館林市史編さん委員会

『幕末譜代藩の政治行動』　鈴木壽子

『明治戊辰梁田戦蹟史』　真下菊五郎

※他の参考文献は本文中に記載

生涯学習館林市民の会講座

館林藩の幕末（前編）

～戊辰戦争終結１５０年を迎えて～

戊辰戦争につながる館林藩の出来事

ご清聴ありがとうございました